

# 研究発表会演題

【助言指導者講師】

四国動物医療センター長 入江 充洋 先生

NO.	支部 演者名 (勤務先)	演 題 名	座 長	時間
1	島田 岩田晋典(渡辺動物病院)	「リン酸トセラニブを使用した頸動脈小体腫瘍疑いの犬の1例」	中島	13:00～ 14:25
2	島田 川北耕太郎(渡辺動物病院)	「先天性肘関節脱臼の犬の1例」	中島	
3	志太 土井公明(どいペットクリニック)	「簡便な直腸粘膜縫合で治癒した脱肛の猫の1例」	中島	
4	駿東 栗原万夢(動物先端医療センター・AdaM)	「両側副腎摘出を行った下垂体依存性副腎皮質機能亢進症の犬の一例」	中島	
5	駿東 都能 敏順(パル動物病院)	「ボサコナゾールが奏功した眼窩内アスペルギルス症の猫の1例」	田中	
6	駿東 小野 啓(パル動物病院)	「犬の感染性結晶角膜症の1例」	田中	
7	富士 後藤 浩(あい動物病院)	「保護猫から検出された蠢く棘口吸虫の1例」	田中	
休憩 (10分)				
8	駿東 星田 裕子(パル動物病院)	「拘束型心筋症を疑った猫の2例」	田中	14:35～ 16:00
9	田方 望月 由華子(伊東動物愛護病院)	「免疫介在性血小板減少症の犬の1例」	田中	
10	磐周 近藤広樹(オーシャン動物病院)	「磐周地区におけるSFTS抗体測定結果について」	影山	
11	西遠 天野 徹(天野どうぶつ病院)	「浜松市における令和3年度の野良猫SFTS抗体保有調査」	影山	
12	西遠 舘澤 仁(浜松どうぶつ医療センター)	「閉塞性排尿困難を起こした尿道腫瘍に膀胱鏡を用いて閉塞解除し、尿道ステントを設置した犬の2例」	影山	
13	西遠 西村千枝(にしむら動物病院)	「環境整備のみで改善した尿マーキングの猫の1例」	影山	
14	静岡 杉山和寿(杉山獣医科)	「Insulin-like growth factor-2産生性肝細胞癌により低血糖をきたした犬の1例」	影山	
教育講演：「知っ得セミナー」 講 師：四国動物医療センター長 入江 充洋 先生				

\*時間は目安です。発表8分、質疑2分

# 1. リン酸トセラニブを使用した頸動脈小体腫瘍疑いの犬の 1 例

岩田 晋典<sup>1)</sup>、渡辺 直之<sup>1)</sup>

<sup>1)</sup> 渡辺動物病院（静岡県）

## 【はじめに】

犬の頸動脈小体腫瘍は末梢化学受容器である頸動脈小体が腫瘍化したもので犬での発生は稀であり、治療に関する報告も不足している。今回われわれは頸動脈小体腫瘍を疑い、リン酸トセラニブを使用し一定の有効性を認めたため報告する。

## 【症例】

7 歳 6 カ月齢、避妊雌、体重 3.4kg、マルチーズ。半年前から興奮時の喘鳴があり、進行性の呼吸困難を主訴に来院した。身体検査にてストライダーおよび右下顎骨後方皮下に境界不明瞭な硬結感のある 2cm 大の腫瘍性病変を触知し興奮時にチアノーゼを認めた。頭頸部レントゲン検査にて喉頭を背側から圧排する軟部組織陰影を認め、腫瘍性病変が疑われたため全身麻酔下での喉頭の観察および CT 検査を実施した。右扁桃領域に Mass 病変を認め喉頭は圧排され、CT 検査では右下顎腺-喉頭間に CT 値 50 程度で造影剤により比較的強い増強効果を認める大きさ縦 2.6×横 3×高さ 3cm の Mass 病変を確認し、経皮的 FNA を行った。細胞診では類円形核を持つ裸核化した均一な細胞集団を認めた。また病変尾側には正常な甲状腺を確認でき、以上の検査所見より頸動脈小体腫瘍と診断した。病変は周囲組織へ浸潤し摘出は困難であり、減量手術も出血のリスクが高いと判断された。放射線治療に関しては麻酔リスク、急性の放射線障害による呼吸困難の悪化が懸念された。第 1 病日よりプレドニゾロン 0.7mg/kg/日の投与を開始し、第 24 病日よりリン酸トセラニブ 2.2mg/kg EOD の投与を開始した。その後、緩徐に呼吸器症状の改善を認め、第 64 病日には病変の縮小（1.7×1.7cm）も認めた。また有害事象として一時的に消化器症状を認めるも通院治療にて対応可能な範囲であった。第 304 病日現在 QOL を維持している。

## 【考察】

犬の頸動脈小体腫瘍は緩徐な増殖を示すため初期の段階では無症状であることも多く早期発見が困難である。本症例は発見時には呼吸困難を呈しており周囲への浸潤も強く外科手術や放射線治療の適応はリスクが高いと判断された。頸動脈小体腫瘍に対してリン酸トセラニブの有効性の報告はないが、報告のある大動脈小体腫瘍と似ているため有効性を期待し今回使用した。治療開始後に呼吸器症状の改善と病変の縮小を認め QOL を大きく改善した。本症例を通して犬の頸動脈小体腫瘍においてもリン酸トセラニブが治療の選択肢の一つになることが示唆された。

## 2. 先天性肘関節脱臼の犬の1例

○川北 耕太郎、渡辺 直之

渡辺動物病院（島田支部）

**【はじめに】** 先天性肘関節脱臼は、小型犬において時折認められる。出生時あるいは数週齢から4カ月齢以内に認められ、多くは3～6週齢で発症することが多く、早期の外科手術により比較的予後は良好とされているが、再脱臼や変形が重度の場合には跛行は残存する。今回、外科手術を実施するも再脱臼を認め、完全な機能回復を得ることが困難であった症例を経験したため報告する。

**【症例と経過】** 柴犬、30日齢、雌、500g。両前肢と左後肢の変形を主訴に来院。触診で肘関節は屈曲した状態で上腕骨遠位外側に肘頭が触知でき、パッドは90度近く内旋し完全に外側を向いていた。徒手にて肘関節を整復するとパッドの向きは正常であった。X線検査で左右尺骨近位部は上腕骨遠位の外側へ脱臼、橈骨頭の亜脱臼を認めた。左後肢は膝蓋骨内方脱臼 Grade4 であった。第24病日には肘の整復が困難となり、第49病日に前肢の手術を実施。肘関節に対して外側切開アプローチ、肘筋、上腕三頭筋の一部、関節包を切開しても整復が困難であった。尺骨の骨幹部で骨切りし整復を行なった。脱臼防止ピンとして上腕骨遠位外側から1.4mmピンを骨幹部に向けて2本、尺骨には1.0mmピンで骨切り部を整復した。術後はロバートジョーンズ包帯を10日間実施した。肘関節の屈曲制限が認められるが短時間の起立歩行は可能であった。第83病日に左右肘関節の腫脹と熱感、左肘関節の再脱臼を認めた。感染を疑いインプラントの除去を実施、細菌培養は陰性であった。第108病日に右側の再脱臼も認められた。治療計画と骨の形態評価を目的にCT検査を実施した。CT検査では上腕骨遠位の外反変形、尺骨近位部の回旋変形、骨棘形成が認められた。両前肢、左後肢のひ矯正骨骨切り術を提案も、これ以上の外科治療を希望されず経過観察となった。第225病日には走れるまでになり、日常生活は問題なく過ごせていた。

**【考察】** 再脱臼および尺骨近位の回旋変形の要因としては、尺骨骨切り後の髓内ピン単独の固定では上腕三頭筋による牽引力に耐えられなかったためと考えられる。筋緊張が強く、骨切りが必要な症例では強固な固定が必要になり、肘頭骨切りおよびテンションバンドワイヤーの併用も検討すべきだったかもしれない。重度の先天性肘関節脱臼の治療には骨だけでなく上腕三頭筋の張力を考慮した術式選択が必要と思われる。

### 3. 簡便な直腸粘膜縫合で治癒した脱肛の猫の1例

○土井 公明

どいペットクリニック（志太支部）

**【はじめに】** 脱肛や直腸脱の症状初期や軽症例では、脱出部粘膜に収斂材や消炎剤を処置して肛門内に収め再脱出を防ぐために肛門の巾着縫合や X 縫合をして治癒観察を行うことが多い。しかし、肛門の縫合操作をおこなった場合、排便管理に難渋することがある。今回、去勢手術で来院した脱肛の猫に簡便な直腸粘膜縫合を実施し、経過が良好だったので報告する。

**【症例および方法】** 去勢手術と肛門周囲が真っ赤という主訴で猫（雑種、推定7ヶ月齢、雄、BW4.4kg）が来院した。初診1ヶ月前から屋外で餌を与え馴化し、7日前から室内飼育を開始。瓜実条虫(+)ブロードライン®処方。肛門部分に赤く腫脹した粘膜が反転しているのを認める。排便は可能との事。初診時はプレドニゾロン軟膏を塗布し脱肛部を収め、家でも行うように指示し、半月後に脱肛の経過を確認して去勢と脱肛の外科処置を同時に行う予定とした。手術来院時の稟告では脱肛の状況は変わらず家で処置はできなかった。去勢手術終了後、伏臥位で直腸粘膜を正常部位がでるまで引き出し、脱肛粘膜の長さ分を折りたたむように正常粘膜部に水平マットレス縫合を5ヶ所実施した。縫合は直腸長軸に対しリング状にならないように前後方向及び横方向の間隔を開けるように配慮した。また縫合糸の結び目が寄せた粘膜嚢内側に埋没する様に結紮を行った。縫合糸は4-0モノフィラメント合成吸収糸のポリジオキサノン(モノスティングァー、ベア社製)を使用した。引き出した直腸を腹腔内に戻し、指で縫合による絞扼部分がない事とスピッツ管を用いて便通の確認をし、手術を終了した。

**【結果】** 12日後の再診時に、術後脱肛なく体調も排便も普通との稟告を得た。

**【考察】** 本方法は、従来の肛門巾着縫合のように肛門の開き具合を調整する必要もなく、直腸粘膜を脱出分だけマットレス縫合により短縮するだけであり、術後の管理も容易である。脱出し腫脹した粘膜を腹腔に収める手技はいくつかあるが、外から粘膜の脱出を塞ぎ止めておくのではなく、直腸粘膜を腹腔に引き上げておくという点で開腹し直腸を腹壁に固定する方法と似ており、今回のような脱肛の症例においては簡便で有用であると考察された。また直腸脱にも応用できることが期待される。

## 4. 両側副腎摘出を行った下垂体依存性副腎皮質機能亢進症の犬の一例

○栗原万夢<sup>(1)</sup>、古川林太郎<sup>(1)</sup>、林佑将<sup>(1)(2)</sup>、小林正行<sup>(1)</sup>

<sup>(1)</sup> 動物先端医療センター・AdAM、<sup>(2)</sup> 青葉どうぶつ医療センター

【背景】下垂体依存性副腎皮質機能亢進症 (Pituitary dependent hyperadrenocorticism:PDH) は、脳下垂体腫瘍によって副腎皮質刺激ホルモンが過剰に分泌することにより起こる。今回、内科療法でコントロールが困難であった PDH に対し、段階的な両側副腎摘出を行うことで良好なコントロールを得られた症例を経験したため、報告する。

【症例】チワワ (7 歳 0 か月、雌、3.1 kg) が、紹介元の病院において ACTH 刺激試験により副腎皮質機能亢進症と診断され治療を行っていたが改善が認められず、治療方針の再検討を目的に当センターを紹介受診した。初診時に腹囲膨満と多飲多尿が認められた。また、紹介元の病院において、トリロスタン (アドレスタン®) による治療が行われており、受診時の投与量は 4.8 mg/kg/日であった。トリロスタン経口投与下での ACTH 刺激試験において、コルチゾール濃度の上昇 (Pre: 16.0  $\mu$ g/dL, Post: 30.4  $\mu$ g/dL) が認められた。また、超音波検査において両側副腎の腫大 (左短径: 11.8 mm、右短径: 11.9 mm) を認めた。CT および MRI の検査を行い、下垂体の顕著な腫大は認められなかった。飼い主が投薬に限界を感じていたため、段階的な両側副腎摘出術を提案した。第 6 病日に左副腎および胆嚢粘液嚢腫の摘出を行い、第 7 病日に再度 ACTH 刺激試験を実施した結果、コルチゾール濃度は術前より低下したが、臨床症状の改善は認められなかった。第 54 病日も同様に、コルチゾール濃度は高値であったため、右副腎摘出を行った。病理組織学的診断は、両側とも副腎皮質過形成であった。両側副腎摘出後の ACTH 刺激試験では、コルチゾール濃度は Pre: <0.1  $\mu$ g/dL, Post: <0.1  $\mu$ g/dL であり、臨床症状の改善も認められた。その後は 4 週間ごとのデオキシコルチコステロンピバレートの皮下投与と、プレドニゾロンの経口投与を行い良好なコントロールを得られている。

【考察】本症例のように内科療法でのコントロールに苦慮する症例に対しては、両側副腎摘出は治療法の一つになる可能性があると考えている。ただし、HAC において標準的な治療法はあくまで内科管理であり、副腎摘出には周術期リスクも伴うため、内科療法の可能性の追求を行い、適応は慎重になるべきである。

## 5. ポサコナゾールが奏功した眼窩内アスペルギルス症の猫の1例

都能 敏順<sup>1)</sup>、小野 啓<sup>1)</sup>、小林 哲也<sup>2)</sup>、一萬田 正直<sup>2)</sup>、金子 嘉徳<sup>3)</sup>

<sup>1)</sup> パル動物病院（駿東支部）、<sup>2)</sup> 日本小動物がんセンター（埼玉県）、<sup>3)</sup> パイネ動物病院（富士支部）

【はじめに】 猫の上気道アスペルギルス症は、副鼻腔アスペルギルス症 (SNA) と副鼻腔一眼窩内アスペルギルス症 (SOA) の2病態に分類される。SOAは鼻腔あるいは前頭洞から眼窩へ感染が拡大する浸潤性の強い病態で、積極的な治療を行なっても予後の悪い致死的な疾患である。今回、ポサコナゾールにより良好に治療された猫のSOAを経験したため報告する。

【症例】 マンチカン、3歳、去勢雄。6カ月前からの鼻炎症状および、2週間前からの右目の瞬膜突出を主訴に来院した。眼球の外背側および前方偏位が見られたため超音波検査を実施し、眼窩腫瘍の圧迫による眼球突出と診断した。腫瘍の細胞診結果から鼻腔腺癌を疑い、CT検査と病理組織学的検査を実施した。病理組織検査より真菌性肉芽腫と診断した。真菌培養検査は陰性であったが、病態と真菌形態から副鼻腔一眼窩内アスペルギルス症と診断した。抗真菌薬の静脈内注射ならびに肉芽腫組織の除去や鼻腔内局所治療等を併用した積極治療を提示したが、飼い主の希望により内服薬による治療を開始した。第43病日からイトラコナゾール 5.5 mg/kg bid poで治療開始したところ、腫瘍が緩徐に増大したため、第212病日より同剤を8.3 mg/kg bid poへ増量したが治療反応が得られなかった。第235病日より抗真菌薬をポサコナゾール 5.5 mg/kg sid poへ変更したところ、腫瘍サイズの縮小がみられ、第330病日には腫瘍が消失した。第410病日にポサコナゾール投与を終了したが、第617病日まで全身状態は良好で、鼻炎症状と眼窩腫瘍の再発はみられていない。

【考察】 本症例は真菌培養検査では陰性だったが、病態ならびにCT検査と病理組織学的検査から臨床的にSOAと診断した。治療経過は良好で、イトラコナゾールに抵抗性を示したものの、ポサコナゾールにより治癒まで至ったが、薬剤感受性試験が実施できておらず、その他の抗真菌薬でも同様に治癒した可能性はある。ただし、ポサコナゾールは2021年から国内販売が開始された薬剤のため、耐性株が未だ出現しておらず、今回の治療結果につながった可能性が高いと考えた。治療成績の向上と新たな薬剤耐性株発生リスクの軽減のためにも、薬剤感受性試験に則った適切な治療計画作成の重要性について、認識を新たにした。今後、猫のSOAにおける抗真菌薬の有効性に関するデータの更なる蓄積が望まれる。

# 犬の感染性結晶角膜症の1例

○小野 啓、都能敏順

パル動物病院

【はじめに】 感染性結晶角膜症 (Infectious Crystalline Keratopathy : 以下 ICK) は、角膜実質に灰白色の枝状混濁を生じ、周囲の炎症を伴わない稀な角膜感染症である。感染の主な原因は $\alpha$ 溶血性連鎖球菌が最も多く、発症の要因となる基礎疾患は他の眼表面疾患に続発することもあるが詳細は不明である。病変部角膜の上皮障害を伴うことはあまりなく混濁は緩徐に進行し、炎症発症に数ヶ月を呈することもある。外観の表現で「結晶性」という言葉が使われるが、真の結晶が沈着することはなく、角膜実質の細菌がコロニー化することで結晶状の外観を呈する疾患である。今回、若齢犬の感染性結晶角膜症に遭遇したため報告する。

【症例】 パグ、1歳7ヶ月、避妊雌。半年以上前より左眼に白濁があり、進行しているとのことで来院した。初診時の左眼は、角膜上皮および上皮下に結晶沈着がみられた。結晶は不整形を呈し、角膜ジストロフィ、脂質角膜症とも異なっていた。また外貌から角膜変性症も考えられたが、発症年齢から否定した。診断がつかないものの病変部に点状表層角膜症がみられたことから、露出性角膜症の一病態と考えヒアルロン酸 Na 点眼液 0.3%を処方した。第9病日に充血、眼瞼痙攣および角膜の赤さを主訴に来院した。結晶部位の上皮は剥離し、実質は水腫状に膨隆し、結晶周囲に炎症反応がみられた。病変部の細胞診では角膜上皮細胞のみが採取され好中球や細菌は検出されなかったが、角膜実質の所見から細菌感染を疑い、セフメノキシム塩酸塩点眼液、ガチフロキサシン水和物点眼液を投与した。第11病日より角膜上皮剥離や角膜炎が軽減した。抗菌薬治療に反応があったこと、過去の報告より得た知見より ICK と診断した。その後、臨床症状により抗菌薬を第94病日まで継続し、第129病日には結晶混濁は消失した。

【考察】 角膜の結晶混濁は、以前は角膜ジストロフィ、脂質角膜症、角膜変性症、薬剤誘発性の混濁が鑑別診断としてあげられていたが、本症例から ICK も鑑別診断に入れるべきであると反省した。ICK は稀な疾患とされ、その病態は不明な点も多いが、過去に角膜変性症など結晶混濁を示す角膜疾患から、角膜潰瘍や穿孔を続発する症例があったことから本疾患がより多く存在していると考え、今後は結晶混濁を示す角膜疾患では、積極的な細胞学的検査や組織検査が必要と考えた。

## 7. 保護猫から検出された蠢く棘口吸虫の1例

○後藤 浩<sup>1)</sup> 佐伯英治<sup>2)</sup> 巖城隆<sup>3)</sup>

1) あい動物病院 (富士支部) 2) サエキベテリナリーサイエンス 3) 目黒寄生虫館

**【はじめに】** 棘口吸虫類はモノアラガイ、ヒメモノアラガイを第一中間宿主、カエル、サンショウウオ、ドジョウなどを第二中間宿主とする人獣共通の寄生虫である。国内では野生の食肉目での寄生はしばしば認められるものの飼育動物、特に猫での寄生は極めてまれである。今回下痢が続く保護猫の直腸から蠢く生きた棘口吸虫が検出されたので報告する。

**【症例】** 症例猫は推定3カ月齢、雌、BW1.12kg (BCS3/5)。3日前に保護してから下痢が続くとのことで来院 (第1病日)。検便でマンソン裂頭条虫 (以下マンソン) 卵を認めプラジクアンテル6倍量を注射した。下痢が続く第4病日に来院、肛門より採便し鏡検したところ、マンソン卵と共に蠢く虫を検出した。虫種不明のままイベルメクチンにて試験的駆虫を実施。虫の動画を撮影し、サエキベテリナリーサイエンスの佐伯英治先生および目黒寄生虫館の巖城隆先生に鑑定を依頼したところ棘口吸虫類であろうとのことであった。症例猫は下痢が続く第7病日にマンソン卵と壺型吸虫卵が、第14、35、52病日にマンソン卵を検出したため計5回駆虫を実施。その後3回検便を実施したが虫卵は検出されなくなり下痢も止まった。

**【考察】** 国内で食肉類に寄生が確認された棘口吸虫類は、浅田棘口吸虫、移峯棘口吸虫、*Echinochasmus perfoliatus*、*E. japonicus*、*Euparyphium recurvatum*、*Isthmiophora melis*の6種で、最も検出頻度が高いのは浅田棘口吸虫である。種の同定にはアルコール保存した虫体の形態学的検索や遺伝子解析が必要であるが、今回は虫体の保存をせず同定できなかった。浅田棘口吸虫の動物での症状は寄生部位周辺の出血を伴う腸炎、人では下痢、粘血便、嘔吐、発熱等で、他の棘口吸虫類も同様と考えられている。国内では猫での棘口吸虫の情報が極めて少なく、宇賀ら(1983)の報告以降の情報はない。浅田棘口吸虫卵は壺型吸虫卵と大きさ・形態共に酷似しており、第7病日に検出した壺型吸虫卵は棘口吸虫卵だった可能性がある。駆虫はプラジクアンテル5倍量が有効と考えられているが、生存のまま排出されたのは多数寄生であることと若齢猫の体重換算では相対的に薬量が不足していた可能性があると考えられた。

## 8. 拘束型心筋症を疑った猫の2例

星田裕子、坂本妃査、小野 啓

パル動物病院（駿東支部）

**【はじめに】** 拘束型心筋症（RCM）は、心筋の収縮機能は正常に保たれながら、心室拡張が制限されている為、心室への血液流入が障害される心筋症と定義されている。RCMは病理組織学的に心内膜心筋型と心筋型に大別され、前者は形態学的に心内膜びまん性肥厚型、心内膜限局性隆起型と異常仮性腱索形成型の3つに細分類される。今回超音波所見上で異常仮性腱索を持つ心内膜心筋型のRCMを疑った猫2例の治療経過について報告する。

**【症例1】** 雑種猫、去勢雄、5歳2カ月、体重4.6kg、頻呼吸と食欲廃絶を主訴に来院。呼吸数120回/分、心拍数126回/分、体温38.2℃。FAST検査で肺水腫を確認した為、酸素化後、X線検査を実施。肺門部の不透過性亢進を確認。超音波検査で、微量胸水、左心房拡大（LA/AO 2.49）、FS 35.1%、僧帽弁逆流と、左心室内を架橋する線維性索状陰影を確認した。RCMによる心不全と診断し、フロセミド、ピモベンダン、テモカプリル、クロピドグレルで治療した。第64病日まで症状は改善していたが、第77病日突然の後肢のふらつきと呼吸促迫後、急死した。

**【症例2】** 雑種猫、去勢雄、15歳7カ月、体重3.9kg、食欲廃絶を主訴に来院。呼吸数24回/分、心拍数96回/分、体温34.9℃。FAST検査で胸水を確認した為、胸水を抜去後、X線検査を実施。心陰影円形化を確認。超音波検査で、左心房拡大（LA/AO 2.26）、FS 30.3%、房室弁逆流、左心室内を架橋する線維性索状陰影、左心房内モヤモヤエコーを確認した。RCMによる心不全と診断し、ピモベンダン、ドブタミン、低分子ヘパリン、フロセミド、テモカプリル、クロピドグレルで治療した。現在は胸水抜去と投薬を継続し第347病日を経過中である。

**【考察】** 左室仮腱索（LVFT）は、全ての猫に存在する正常構造物だが、LVFTを足場に線維性結合組織の増生が加わり、線維性架橋が形成されるという報告がある。今回病理学的裏付けはないが、左心房拡大、心不全、左心室内仮性腱索を確認した事から、心内膜心筋型RCMの疑いが強いと考えた。食欲低下や呼吸数増加時に心不全兆候が出ている事から、呼吸回数測定と食欲に注意し、腎機能に配慮した利尿剤の使用が重要であると考えた。また動脈血栓塞栓症に対して予防的抗血栓療法 of 早期開始の重要性を再認識できた。今後は、クロピドグレルに加え、リバーロキサバンの併用も検討する必要があると考える。猫の血栓症に、抗血小板薬と抗凝固薬の併用の効果に関する症例情報のさらなる蓄積が望まれる。

## 9. 免疫介在性血小板減少症の犬の1例

○望月 由華子<sup>1)</sup>、今中 奈美

<sup>1)</sup>伊東動物愛護病院

【はじめに】原発性免疫介在性血小板減少症 (ITP) は臨床現場でしばしば遭遇する疾患であるが、原発性か二次性かを正しく除外することが重要であり、かつ出血傾向などの臨床症状がみられる場合、速やかな治療介入がなされなければ致死的疾患となりえる。今回、除外診断にて原発性 ITP を診断し、治療難治性であった症例を経験したので報告する。

【症例】秋田犬とラブラドルの雑種犬、9歳齢の去勢雄、体重22.0 kg。元気食欲の低下、体表の紫斑がみられ、各種検査により除外診断にて原発性免疫介在性血小板減少症と診断した。プレドニゾロンによる治療を開始したが改善に乏しく、ミコフェノール酸モフェチル、続いてガンマガードを使用したが生治療反応は乏しかった。レフルノミドによる治療を開始したところ、緩徐ではあるが血小板数の改善がみられた。しかし第30病日より、汎血球減少症が次第に進行し、骨髄検査を実施したところ無効造血との診断であった。そこで脾臓摘出術を実施したところ、全血球数は速やかに改善し、現在も良好に推移している。

【考察】原発性 ITP に対するレフルノミドの有効性についての症例報告はまだ少ないが、原発性 ITP の治療薬として有効であると考えられた。しかし薬価が高く、大型犬であれば経済的負担が大きい。本症例は脾臓摘出術を実施したことで速やかに完全緩解したことから、内科治療に対する金銭的問題が考慮される症例に対して根治的治療手段になり得ると考えられた。

原発性 ITP の診断の一助として LD アイソザイム分画の測定についての文献がいくつかあり、本症例でも LD アイソザイム分画を測定し、正常犬と比較したが有意差はみられなかった。

## 10. 磐周地区における SFTS の調査結果について

近藤 広樹<sup>1)</sup>、音成 伸悟<sup>1)</sup>、鈴木 健太郎<sup>2)</sup>、宮田 洋志<sup>3)</sup>、  
岡林 環樹<sup>4)</sup>、目堅 博久<sup>4)</sup>

<sup>1)</sup>オーシャン動物病院（静岡県）、<sup>2)</sup>ウッドベル動物病院（静岡県）、<sup>3)</sup>COO 動物病院（静岡県）、  
<sup>4)</sup>宮崎大学産業リサーチセンター（宮崎県）

### 【はじめに】

2020年に静岡県西部で初めて猫のSFTSウイルスの感染例が発生し、その後県内でも何例か感染報告が上がっている。昨年西遠支部で感染状況調査が行われ、一部のエリアでの感染も確認された。本年静岡市においても、安倍川西岸で4例の感染報告が上がっており、内3頭の死亡が確認されている。感染拡大が懸念される一方、静岡県内での最近の感染状況が把握できていないのが現状である。そこで、浜松市に隣接する磐周支部エリアにおける感染状況の確認を目的として、SFTSウイルス抗体調査を実施したので報告する。

### 【材料および方法】

磐周地区のSFTSウイルスの実態調査のため、2022年4月から2023年1月までの10か月間で、野良猫、外猫及びマダニ感染を確認した犬猫を対象として調査を実施した。採血した検体（EDTA血漿及びヘパリン血漿）を冷凍保管し、宮崎大学に依頼してPCR検査を実施した。SFTSウイルス検査に際して、同時にパルボウイルス及びカリシウイルスの調査も実施した。

### 【結 果】

SFTSウイルスの感染は今回確認されなかった。同時に実施されたパルボウイルス及びカリシウイルスについては、各2例ずつの感染が確認された。

### 【考 察】

今回は約30検体の調査を行ったが、検体数も少なくエリアとしても限定される結果となった。本調査では、SFTSウイルス感染は認められなかった。しかし、昨年では浜松の一部エリアで、その後も県中部での感染も確認されているため、磐周地域にも感染動物が入ってきている可能性が示唆される。今後も調査を続けていくとともに、県西部地区が一丸となってデータの集計ができれば、飼主への外部寄生虫予防の啓発になり、ヒトのSFTS患者の削減や予防といった公衆衛生的寄付にも繋がるのではと考える。さらに今回、パルボウイルスやカリシウイルス感染猫が市中にも存在することが確認されたため、改めて飼主へ伝染病予防接種を推奨する必要性を感じた。今後も県内の各地域においても調査を行い、静岡県全体でのデータ集積や飼主への啓蒙行動、さらに公衆衛生面においても社旗貢献となる活動が広がることを期待する。

## 11. 浜松市における令和3年度の野良猫 SFTS 抗体保有調査

○天野 徹<sup>1)</sup>、浅木 直人<sup>1)</sup>、前田 健<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>一般社団法人浜松市獣医師会、<sup>2)</sup>国立感染症研究所

**【はじめに】** SFTS (重症熱性血小板減少症候群) ウイルスによる感染症患者が 2011 年に中国で初めて報告され、日本国内でも 2013 年に報告された。2017 年 3 月以前は SFTS ウイルスに感染した動物で発症するのは人だけだと考えられていたが、2017 年 4 月に猫、同 6 月に犬、同 7 月にチーターでの発症が認められた。その後は、発症動物から人への感染が確認され問題視されている。

静岡県内では、2020 年 8 月に浜松市において県下初の SFTS 感染例が猫で確認され、2023 年 1 月までに 8 頭の猫の感染を同市内で認めている。2021 年 3 月には静岡県中部保健所管内にて県下初の人の感染例が報告された。当会の地域内での感染確認を受け、高い致死率を示す猫の SFTS の調査を 2021 年度の事業として計画した。今回、当会で取り組んだ SFTS 抗体保有調査の結果を報告する。

**【材料および方法】** 浜松市内で行われている野良猫の不妊去勢事業の手術を受けるため一般社団法人浜松市獣医師会会員病院に搬入された猫等を対象とした。血清を採取したのち凍結保存し、検査を国立感染症研究所で行った。

**【結 果】** 採取した 429 検体の IgM 抗体と IgG 抗体を測定し、更に IgM の一定の値を超えた 29 検体を SFTS ウイルス遺伝子検出試験に、IgG の一定の値を超えた 6 検体を中和試験に供した。SFTS ウイルス遺伝子検出試験では 29 検体すべて陰性であった。中和試験では 4 検体で抗体の存在が伺われた。抗体陽性であった 4 検体はすべて同一河川流域の猫から採取されたものであった。これまでに認めた 8 例の感染猫の居住地は、この河川の下流およびこの下流に合流する河川流域に集中しておりこれらの結果には地形的要因が反映されていると推測される。

## 12. 閉塞性排尿困難を起こした尿道腫瘍に膀胱鏡を用いて閉塞解除し、尿道ステントを設置した犬の2例

○館澤 仁<sup>1)</sup>、森田 大地<sup>1)</sup>、加藤 幸子<sup>1)</sup>、片桐 光貴<sup>1)</sup>、保坂 浩二<sup>1)</sup>、布施 誠丈<sup>1)</sup>、小林 晋<sup>1)</sup>、松岡 翔<sup>1)</sup>、結城 豪<sup>1)</sup>、木俣 新<sup>1)</sup>、加藤 尚希<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup>浜松どうぶつ医療センター、<sup>2)</sup>コパ動物病院

**【はじめに】** 犬の尿道腫瘍ではときに機械的閉塞を起こし、排尿困難のみならず、腎機能障害を起こすなど処置が遅れると致命的になる場合がある。尿道閉塞に対する緩和的な手法としてはカテーテル導尿が一番安価で簡便なため選択されるものの、腫瘍による狭窄のため挿入に苦慮することも少なくない。今回、重度の狭窄を呈した尿道腫瘍の犬2症例に対して膀胱鏡により腫瘍を一部除去し、膀胱まで開通させて尿道ステントを設置したのでその概要を報告する。

**【材料および方法】** 症例1: ビーグル、雌、7歳齢 1ヵ月前から尿が出ないとの主訴で来院。超音波検査にて尿道に腫瘤を確認した。膀胱への疎通性の確認のため3Frカテーテルの挿入を試みたが入らなかった。第6病日に膀胱鏡を挿入し、鏡視下で鉗子を用いて腫瘍を除去し膀胱まで疎通させ、8Frのカテーテルを留置した。第27病日に透視下でWeaselワイヤーを挿入し、それに沿わせてイントロデューサー・シースを挿入、尿道造影にて狭窄部位を確認し、狭窄部前後1cmをカバーするように8mm×60mmの尿道ステントを設置した。

症例2: 雑種、雌、14歳齢 3週間前からの頻尿を主訴に来院。腹部超音波検査にて尿道および膀胱に腫瘤を確認。第13病日にCT撮影にて尿道を閉塞する石灰化病変を認めた。膀胱鏡にて腫瘍による閉塞を認めたため、症例1と同様に鉗子により腫瘍の除去をおこなった。腫瘍は明らかに白色を呈しており、正常組織と区別が可能であった。尿道から膀胱への疎通を確認後8Frのカテーテルを設置し、その後8mm×60mmの尿道ステントを留置した。

**【結果】** 症例1は尿道ステント設置後、尿失禁もなく自力排尿可能であった。症例2は時々血尿が見られるものの尿失禁もなく、自力排尿可能であった。処置前よりも頻尿の症状も緩和された。

**【考察】** 尿道腫瘍では腫瘍により狭窄を起こし容易にカテーテルが挿入できないことも多い。膀胱鏡により鏡視下で腫瘍除去することで尿路を確保し、尿道ステントを設置することは尿道腫瘍の犬のQOLを維持するのに役立つと思われた。

## 13. 環境整備のみで改善した尿マーキングの猫の1例

○西村千枝

浜松市開業

**【はじめに】**猫の不適切な場所での排泄（トイレ以外での排泄）行動は、未去勢オスの正常な行動パターンのひとつとして、または身体的疾患あるいは心理的要因などにより生じるが、その匂いや片付けの煩雑さなどから飼い主にとっての心理的負担が大きい。今回、受診までに比較的経過が長かったものの環境整備のみで症状が改善した症例を紹介する。

**【症例】**: 6才令、雑種猫、去勢雄、屋内飼育（脱走癖あり）、先住猫（去勢雄）1頭、4年前に尿石症の既往あり

**【主訴】**: 1~2年前から家の中の壁やベッド・椅子の足などに排泄するようになり困っている。

**【問題概要】** [経過] 1~2年前から外へ脱走、トイレ以外に室内のあちこちで立位で排尿するようになった。トイレでの排尿は1日1~2回、トイレ以外でも1日1~2回で他院にて抗うつ薬などを処方してもらったが頻度も程度も変化なし。[生活環境] 2階建て5LDKの一軒家で家中どこにでもアクセス可能。近所に野良猫が多い。トイレは3カ所に設置してある。先住猫は症例猫の面倒をみようとするが症例猫は関心がなく先住猫をかわいがっていると遠くからじっと見ていることが多い。[症例の様子] 来院時の車内で興奮し、嘔吐、下痢、排尿していた。到着からしばらく散瞳、パンティングが続いていたが2時間後にはソファでお腹を上にして寝ていた。

**【診断】**: マーキング（動機として野良猫に対する不安と飼い主の関心への欲求が考えられた）

**【治療】**: ①脱走防止の徹底/屋外への欲求のコントロール②猫のニーズを満たしバックグラウンドストレスを減らす③マーキング場所へのアクセス制限④爪とぎの増設⑤トイレ環境の見直し

**【経過】**: 初診時のカウンセリング以降は2~4週間に1回LINEにて相談を継続中 [1カ月後] 2回/月、見慣れない段ボールに1回とトイレの位置を変えた時に1回 [2カ月後] 6回/月、孫娘が遊びに来た日に4カ所、見慣れない発泡スチロールに1回、関心が得られなかった時に1回 [3カ月後] 1回/月 構ってあげられなかった時

**【まとめ】**: 不安傾向の強い性質で薬物治療が有効と考えたが、トイレ環境の改善、脱走の防止、ニーズを満たすことで改善が認められた。今後も生活環境の変化などによる再発に注意しながら経過を見守っていく予定である。

## 14. Insulin-like growth factor-2 産生性肝細胞癌により低血糖をきたした犬の1例

○杉山 和寿<sup>1)</sup>、杉山 由貴奈<sup>1)</sup>、杉山 智之<sup>1)</sup>、山本 花<sup>1)</sup>、田中 春希<sup>1)</sup>、  
石原 勇介<sup>2)</sup>

<sup>1)</sup> 杉山獣医科 (静岡県)、<sup>2)</sup> (株)エアデック mini

**【はじめに】** 一般的に最も多い低血糖の原因はインスリノーマであるが、次いで多いのが膵外腫瘍による低血糖 (non inslet cell tumor hypoglycemia:NICTH)といわれている。NICTH は腫瘍による高分子インスリン様成長因子 (IGF-2) 産生が原因とされ、犬においても数報の報告があるが、低血糖をきたす機序についてはまだ未解明の点も指摘されている。今回 IGF-2 産生性肝細胞癌による犬の NICTH を診療する機会を得たので報告する。

**【症例】** チワワ、体重:2.9Kg、避妊雌、12歳2カ月齢、既往症:MMVD(B2)ピモベンダン投薬中、1週間前から多飲多尿、深夜及び早朝における虚脱、起立不能、震え、ふらつき及び流涎等を主訴に来院した。

**【経過】** 初診時血液検査において低血糖、ALP、GGT、LIPの上昇が認められた。腹部超音波検査及びCT検査により、肝臓方形葉全域を占拠する直径約8.5cmの腫瘍が認められた。しかし、膵臓領域には腫瘍所見を認めなかった。血中インスリン値及びInsulin-like growth factor-I (IGF-1)は各々 $4.5\mu\text{IU/ml}$ 及び $1\text{nmol/L}$ と低値であった。ブドウ糖投与及び肝底護剤による2週間の内科的治療を施したが好転せず、第15病日に腫瘍摘出手術を行った。術後速やかに低血糖が改善し、第28病日にはALP、GGT、LIPも正常値となった。術前は多飲多尿を呈し、ACTH刺激試験結果も高値であったが、術後には正常となった。さらに、第100病日に測定したIGF-1及びインスリンは正常値となっていた。病理組織検査の結果、腫瘍は肝細胞癌で完全切除されており、脈管侵襲は確認されなかった。症例は200病日を経過して特異的症候はなく、腫瘍再発及び転移病変を認めず良好に経過している。

**【考察】** 既報によれば、NICTHにおいて低血糖発現にIGF-2が関与していた症例では、血中インスリン値及びIGF-1値の抑制がほぼ全例で認められており、本症例でも同様に低下していた。さらに、本症例の腫瘍をIGF-2抗体で免疫染色した結果、正常な肝臓組織と比較して多量のIGF-2を産生していたことが判明した。これらの結果から本症例のNICTHは、腫瘍が産生した多量のIGF-2により誘導されたものと考えられた。また、術前には異常値であったALP、GGT、LIP、血中インスリン値及びIGF-1並びにコルチゾール値も術後には正常値となったことから本症例におけるIGF-2産生性肝細胞癌は、これらの生合成にも影響を及ぼしていたことが示唆された。